

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00837

研究課題名（和文）センテンス・コンバイニングによる英語ライティング指導法の基礎的研究と教材の開発

研究課題名（英文）Development of teaching English writing through sentence combining practice and its teaching materials

研究代表者

麻生 雄治（ASO, Yuji）

大分大学・教育学部・教授

研究者番号：70736884

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって、国外（アメリカ合衆国、連合王国）の初等中等学校、語学学校におけるセンテンス・コンバイニング指導の現状と国内の高等学校におけるセンテンス・コンバイニング指導の現状を把握し、比較することができた。また、センテンス・コンバイニングの具体的な指導法に関しては、センテンス・コンバイニングの技法を細かく分類し、それらが、日本人初級英語学習者にとって難易度がどのように異なるかを確認することができた。さらに、実際に調査を進めるうえで数多くのセンテンス・コンバイニングの練習問題を作成し、（難易度を整理する必要はあるが）ある程度まとまりのある教材を作成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語を第一言語とする国々の初等中等学校では一般的に行われているセンテンス・コンバイニング指導（練習）が、これまでの日本の英語教育、とりわけライティング指導においては、ほとんど体系的に扱われていなかったが、本研究で、日本人英語学習者においてもセンテンス・コンバイニングの練習は、英作文の複雑性の向上に貢献することが明らかになり、今後の日本の中等学校での新しいライティング指導法の一つとして、センテンス・コンバイニング指導の実現可能性を示唆することができた。

研究成果の概要（英文）：This study grasped and compared the current status of sentence combining instruction in elementary, secondary, and language schools outside of Japan (the United States and the United Kingdom) with that of sentence combining instruction in high schools in Japan. Also, this study identified specific methods of teaching sentence combining, classifying them in detail to see how they differ in difficulty level for Japanese learners of English. In addition, this study created a number of sentence-combining exercises in the course of this research, and developed a certain amount of material (although the degree of difficulty needs to be sorted out appropriately).

研究分野：英語教育学

キーワード：英語指導法 ライティング センテンス・コンバイニング 英語表現 英作文の複雑性 英作文教材

1. 研究開始当初の背景

日本人英語学習者の英作文の特徴の一つに、一文が短く、文をつなぐことが苦手であることが挙げられる。つまり、複雑性に富む英語を書くことが難しいのである。これまで日本の英語教育では英語の正確性を追求することが過度に重視されてきたため、その反省に立ち、ようやくコミュニケーション重視へと舵をきるようになり、正確性だけでなく流暢性も授業内で指導することが求められるようになった。その影響で、近年では英語を話したり書いたりできる学習者が増えてきているように思われるが、その英文はやはり英語母語話者と比較するとかなり稚拙であると言わざるをえない。その原因の一つが英文の複雑性に欠けるということである。

これまでの日本の高等学校における英語教育では文法等の正確性を重視した指導の効果の研究は多いが、英作文の流暢性や複雑性を重視した研究は少ない。特に、複雑性に関しては学習用教材もほとんどなく、複雑性を意識した学習者はおろか指導者さえもそれほど多くないと思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語を第一言語(L1)とする国々の初等中等学校や第二言語としての英語を学ぶ語学学校におけるセンテンス・コンバイニング指導の現状と国内の高等学校におけるセンテンス・コンバイニング指導の現状を把握すること、日本人英語学習者にとって適切な、また効果的なセンテンス・コンバイニング指導法を検討すること、そして、日本人英語学習者のセンテンス・コンバイニングの練習用教材を作成することである。

3. 研究の方法

(1)アメリカ合衆国(カリフォルニア州パロアルト)の中等学校、連合王国(レディング、ノリッジ)の小学校や語学学校を視察し、授業観察、現地教員との情報交換、教材や資料の収集を行った。また国内の高等学校の授業視察と教材(教科書)分析を行った。

(2)日本の教科書教材やL1の国々のセンテンス・コンバイニング練習問題から日本人英語学習者に適するセンテンス・コンバイニングの技法を検討した。

(3)公立高校2年生を対象に、センテンス・コンバイニング練習が英作文の複雑性の向上に及ぼす効果の有無を調査した。センテンス・コンバイニング練習の前後で自由英作文を書き、1st draftと2nd draftの複雑性をT-unitで計測し、比較した。

(4)大学生を対象に、センテンス・コンバイニング練習が英作文の複雑性の向上に及ぼす効果の有無を調査した。センテンス・コンバイニング練習の前に4週間にわたって4回(2つのテーマを2回ずつ)自由英作文を書き、さらに、センテンス・コンバイニングの練習の後に、4週間にわたって4回(2つのテーマで2回ずつ)自由英作文を書き、それぞれの英作文の複雑性をT-unitで計測し、比較した。

(5)コントロールの有無の違いによるセンテンス・コンバイニングの特徴を調査した。センテンス・コンバイニングにおけるコントロールとは、例えば、I arrived in New York City.とI saw police rushing everywhere.を結合する場合に、(Use *when*)や(従属接続詞を使って)のように、ヒントをあらかじめ示す方法によるものである(Enginarlar, 1994)。

(6)日本人大学生を対象に、センテンス・コンバイニングの8つの型のうち、どの型が日本人英語学習者にとって易しい(使いやすい)のか、あるいは難しい(使いづらい)のかの難易度を調査した。

4. 研究成果

(1)国内外の学校への教育事情視察と教材の分析から、センテンス・コンバイニングの具体的な指導を検討し、教材を開発することができた。L1におけるセンテンス・コンバイニング指導は練習問題の英語の語彙や英文の難易度が高く、またセンテンス・コンバイニングで10文を1文にするなど分量的にもレベルが高く、日本人英語学習者にとってはかなり難しく、そのまま日本の英語教育で使用することは困難であることが確認できた。

(2)日本人英語学習者が学ぶべき8種類のセンテンス・コンバイニングの型(等位接続詞を使う セミコロンを使う 従属接続詞を使う 関係詞を使う 分詞構文を使う 名詞を修飾する 同類をまとめる 重文+複文など複数の方を使う)を作成した。

(3)センテンス・コンバイニング指導は日本人高校生にとって理解可能であり、練習によって英

作文の複雑性も、劇的ではないにせよ、ある程度向上することが確認された。

(4) センテンス・コンバイニング練習の前後において英作文の複雑性の向上が確認された。これにより、センテンス・コンバイニング指導は日本人大学生にとって理解可能であり、練習によって英作文の複雑性は向上することが明らかになった。

(5) あらかじめ作成した8つのセンテンス・コンバイニングの型において、コントロールがあるほうがセンテンス・コンバイニングが正しく行われる(成功する)場合と逆でないほうが正しく行われる場合があり、必ずしもコントロールがあることによってセンテンス・コンバイニングが容易に成功するとは限らないことがわかった。

(6) 文法学習の影響が強いためか、等位接続詞、従属接続詞、関係詞を用いたセンテンス・コンバイニングは比較的容易にできるが、3文以上を1文にするものやセミコロンを用いるものは難易度が高いことがわかった。

全体を通じて、日本の英語教育にセンテンス・コンバイニング指導を導入する場合、L1で行われている指導をそのまま援用することは、分量や難易度の面から難しいが、日本人英語学習者のためのセンテンス・コンバイニング指導を構築すれば十分に実施可能だといえる。しかしながら、センテンス・コンバイニング指導を日本の英語教育で確立するにはまだ課題は山積していると思われる。使用する教材の語彙や英文の難易度、分量も日本人英語学習者に適するものでなければならない。今後さらに、より具体的な指導法と適切な指導用教材を作成することが望まれる。

<引用文献>

Enginarlar, H. (1994). Sentence combining plus: A new use for an old technique. *ELT Journal*, 48(3), 214-221.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 麻生雄治 | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 コントロールの有無の違いによるセンテンス・コンパニングの特徴 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 九州英語教育学会「紀要」第50号 | 6. 最初と最後の頁 89-98 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 麻生雄治 | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 センテンス・コンパニングで日本人高校生の英作文の複雑さは向上するか | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 九州英語教育学会「紀要」第51号 | 6. 最初と最後の頁 101-109 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 日本人英語学習者のためのセンテンス・コンパニング練習：難易度の検討 |
| 3. 学会等名 全国英語教育学会第47回長野研究大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 パラグラフ・ライティング指導におけるセンテンス・コンパニング練習の有効性 |
| 3. 学会等名 日本リメディアル教育学会九州沖縄支部研究大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 コントロールの有無の違いによるセンテンス・コンパニングの特徴 |
| 3. 学会等名 第49回九州英語教育学会長崎研究大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 ライティング指導におけるセンテンス・コンパニング練習：内容と方法の検討 |
| 3. 学会等名 日本リメディアル教育学会九州沖縄支部大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 日本のライティング授業におけるセンテンス・コンパニング指導の実現可能性 |
| 3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 日本人英語学習者のためのセンテンス・コンパニング練習の方法とその効果 |
| 3. 学会等名 日本リメディアル教育学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 センテンス・コンパニングで日本人高校生の英作文の複雑さは向上するか |
| 3. 学会等名 第50回九州英語教育学会佐賀研究大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 麻生雄治 |
| 2. 発表標題 ライティング指導におけるセンテンス・コンパニング練習：難易度の調査 |
| 3. 学会等名 日本国際教養学会第11回全国大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
| | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |